

源氏物語「ねーなく」考

鈴木浩一

一、「ね」とは

小学館の日本国語大辞典^①では「ね【音・哭】」の語義の③と④で

③虫、鳥、獣などが鳴く声。その用例として

桐壺 いとどしく虫のねしげきあさぢふに露おき

そふる雲のうへ人

④人の泣く声。その用例として

松風 変らじと契りし事をたのみにて松のひびきに

ねをそへしかな

と、共に源氏物語から用例を引いてゐるが、「桐壺」の歌で「虫のね」は「虫の鳴く声」として、それを感じて雲の上人が涙をこぼした（「露おきそふる」とするの）に異存はないが、「松風」の「松のひびき」に添へられた「ね」は、多くの解説書が「人の泣声」としてゐるが果たしてさうであらうか。

偶々二つ並べられた為、両歌の構成が酷似してゐる事に嫌でも気付かされる。「桐壺」の歌では「虫のねしげきあさぢふ」に「雲のう

へ人」が「露をおきそへ」たと詠つてゐるが、殿上人が「露」を作れる筈はなく、此れは「虫のね」を聞いて「雲のうへ人」が「涙」を誘はれたと詠つてゐるもので、後者の「松風のひびき」に「ね」を添へるのと構成としては全く同一である。只前者では「虫のね」（音）に誘はれたものが「露（涙）」であるのに対し、後者では「松のひびき」（音）に「ね（泣声）」（音）を添へたとするのが現行解釈で、此れには付言した如く疑義なしとしない。

先に万葉集及び勅撰集の用例から「泣く」折の「ね」の多くは「なみだ」と解すべきものとして来たが^②、この「松のひびき」に添へられた「ね」も「涙」とするならば、両歌の後半の構成と内容は全く同様のものとなり、風にそよぐ松ヶ枝に泣声を揚げるなど、言ふ唐突さから免れて、しつとりした趣の歌が出来上がる。

「松風」の歌は、源氏が明石の上に形見として残した琴を改めて弾いて、其の変はらぬ調べは、嘗て「変はらじ」と言つた誓ひが今もそのまゝである事の証であると詠つた源氏の歌に対する、明石の上の返歌となつてゐるもので、此の「ね」を琴の「音」と取るのは状況に合はない。何故なら琴を弾いてゐるのは源氏であつて、明石の上が琴を響かせてゐる訳ではないのであるから、返歌に「音をそ

へし」とは歌えない筈である。

松籟に合はせて形見の琴を弾ずる源氏の、嘗て其の琴を弾いた折の「変はらじ」の誓ひを、今偲び且つ頼み、色変へぬ松の葉の響きに、聴き手の明石の上が「ね(泣)」を添へたものと解すべきものであらう。その結果桐壺の歌とこの歌の下の句は形式上の一致のみならず、内容まで同じ「涙」となるのである。

如何に感情に迫られたからと言つて大人が声を挙げて泣けば、はしたないと見做されるのは昔も今も同様であらうから、松が枝のさゝめきに泣声を挙げたりしたら、古代とて響聲を買はないではおられまい。

女性ならば悲しみの余り泣く事は珍しくないとしても、慎みある女性は「泣声(泣音)」は抑へて涙を絞る泣き方となる筈で、はしたなくも「声」を上げて泣いたりしては、恐らく源氏は二度と明石の上を訪はうとはしなくなるのではなからうか。

「ねー泣く」表現は万葉集中に多数の用例を見出すことが出来るが、その「ね」の表記に「泣」が当てられてゐる例が有り、「泣」はまた他の歌では「なみだ」と訓ぜられ、更に「泣」は他の「ね」音の語の借訓にも当てられてゐて、上代では「涙」は「ね」とも言はれてゐた事が知られる。そのやうな理解が又王朝時代の歌の理解をも深める事を別紙②に纏めたが、偶々好適な引用例を辞書中に見出したのを機に、以下源氏物語の「ねーなく」用例について哭・泣を考察して見る事とする。

泣く折の「ね」に対する現代の主導的解釈姿勢はそれを「音」とするものゝやうであるが、声を上げて泣く事を大人の泣き様と見な

さなかつた事は、万葉の「手童のねのみなきつつ」や「泣く児なすねのみしなかつ」などの作例からも察せられ、大人が声を挙げて泣くとなれば其れは常態ではなく、それだからこそ「恋わびぬねをだになかむ声たてていづこなるらむおとなしの里拾遺集③(76)」の願望となるのであつて、大人が声を挙げて泣くのは、大方から心無き業と見なされたであらう事は疑ひを入れない。

二、各用例について

源氏物語では泣く折の「ね」の記述は凡そ三十程もあつて、それ等はなべて底本では仮名書きであるものが、現代の刊行書では編注者の見解により、その殆んどが「音」と書き変へられ、仮名書きの儘としたものも含めて、「ね」は総べて「泣声」とされてゐる。源氏物語索引④からそれらを拾ひ出し、それが果たして妥当か否かを考察してみたい。

物語からの引用は総べて新日本古典文学大系本⑤の校注者による修正文とした。引用文中ルビが付いてゐる漢字は底本では仮名書きである事を示し、括弧に入れられたルビは本来あるべき仮名遣ひ(歴史的仮名遣)を示してゐる。

先づ「帚木」

身のうさを嘆なげくにあかあで明くる夜は
とりかさねてぞねも泣なかれける

これは空蟬の返へしの歌で、元歌は源氏の

つれなきをうらみもはてぬしのゝめに
とりあへぬまでおどろかすらむ

である。これら二つだけからは返歌の「ね」は「音(泣声)」とも「泣(涙)」とも定めかねる。

鳥に夜明けを知らされる迄の此の歌の一夜は、空蟬の寝所にまで押し掛けた源氏の身分を恃む強引な口説きと、宮中出仕もあり得た出自ながら今は地方官の妻に過ぎない空蟬の、或は有り得た源氏との係はりと現実との懸隔から、それを峻拒する争ひの連続であるが、呼べば応へる近間に侍女も居り、泣き叫べば道ならぬ接触が忽ち人に知られる状況にあった。

空蟬の嘆きは激しかったに違ひないが、涙に就いても泣声同様一切記述がない。則ち空蟬の歌の「ね」は「泣声」とも「涙(ね)」とも比定する事が出来ない。孰れに附いてもバックグラウンドの描写に照応する叙述が無いからである。

文法上は「ね」は又「泣く」の名詞形でもあって、「ねに泣く」、「ねを泣く」、「ねのみし泣く」は孰れも「泣く」と同義ともされる¹⁾が、此処の返歌の「ねも泣かれ」も「泣く」の強調型と捉らへて良いものゝ様に思はれる。則ち「泣く」の名詞形の「ね」が「哭(泣声)」や「泣(涙)」の「ね」同様曉に鳴く鳥の「鳴」の掛詞となつて返歌に詠まれてゐると見るものである。多くの刊本の様に「泣声」とするのでは状況に合はない。

「夕顔」の地の文章

九月二十日の程にぞおこたり果て 給て、いといたく面瘦
せ給へれど、なか／＼いみじくなまめかしくて、ながめがち
に音をのみ泣きたまふ。

夕顔の死後、大患から回復した直後の源氏の様子描写である。「おこたる」は「病勢が衰へる」の意。此の「音をのみ泣く」に行する記述は、「ひどく面瘦れしておいでだけれど、却つてなかなかなまめかしくて、物思ひに沈みがち」とある。此のやうな様子にしてゐ乍ら果たして泣声をあげるものであらうか。物思ひと号泣が共存し得るとは到底思えない。

また「ねをのみ」と泣き方を限定してゐるのであるから、「ね」を「泣声」と取るなら此の泣き方は泣声だけを上げるものとなり、極めて作爲的である。そのやうな泣き方をしてゐる人を、「なかなかいみじくなまめかしくて」などと描写するだらうか。答は決定的に「否」で、これによつてもこの場合の「ね」を「音」とすることの不合理が察せられるであらう。抑々男子の源氏に啼泣は似合はない。

これは「音をのみ泣く」と底本の「ね」を「音(泣声)」と取つた為に起こつた不合理で、万葉の例が示す様に「ね」を「泣(涙)」とするならば、前後の表現の齟齬は消滅する。

「夕顔」の中の歌

蝉の羽もたちかへてける夏衣かへすを見ても

音は泣かれけり

此れは前段で形見とも言ふべき空蟬の小桂を返すのに付けた源氏の

逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の

朽ちにけるかな

への返歌であつて、此の「涙で」袖の朽ちにけるかな」を踏まへての「ねは泣かれけり」なのであるから、此の「ね」は「泣声」ではなく「涙」でなければ辻褄が合はない。

ある解説書では返歌の「音は泣かれけり」を「声をしぼって泣かれたことだ」と釈してゐるが、「声をしぼって」など、歌の何処にも示されてゐない状況を付け加へねばならぬのは、「ね」を「泣声」とするからで、素直に「ね」＝「涙」とすれば、そのやうな勝手な状況の創作は不要となる。

「葵」の地の文章で、

たゞつくづくと音をのみ泣き 給て、おりくは胸をせき
上げつゝ、いみじう耐へがたげにまどふわざをし給へば

「音」は、底本の仮名書きの「ね」を編者の見解により書き替へたものであるが、「つくづく」と声を上げて泣く」など、言ふ表現が許されるものであらうか。次の「せき上げつゝ」は出ようとする声を抑へようとする力が働く結果であるから、その前に「音をのみ泣い」

ては記述が前後撞着する結果となる。此処の「ね」は「涙」であつてこそ初めて前後整合した文章となり得るのである。

「須磨」の地の文章と共に

うち休みわたれるに、ひとり目をさまして枕をそばたて、
四方の嵐を聞き 給に、波たごころもとに立ちくる心
して、涙落つともおほえぬに枕浮くばかりになりけり。琴
をすこし掻き鳴らし給へるが、我ながらいとすこし聞こゆれ
ば、弾きさし 給て

恋わびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や
吹くらん

とうたひ給へるに、人々おどろきて、めでたうおぼゆるに、
しのばれで、あいなう起きあつゝ、鼻を忍びやかにかみ
わたす。

この歌は前文となつてゐる地の文章の描写を踏まへたもので、両者の対応を見てみると、前文では「波」が枕元に寄せて来たかと思へ、枕はその「波」かと思えるほどの「涙」に浮くばかりであると言つてゐて、枕元は「波」が寄せて来たかとも思えるばかりの大量の「涙」である事が知られる。これを踏まへて作られた歌の「まがふ」は、枕元の「涙」が「波」かとも見えた事を指すものであるから、歌はれてゐる「ね」を「涙」と取らないと前文の記述と整合しない。歌の「ね」を「音」とする通行の解釈では状況に合はない。

この歌は「まがふ」が「よく似てゐて見分けが付かない」事を意

味する用例として当初に上げた国語大辞典に引用されてゐるが、此処の前文で枕元の「涙」が「波」に例へられてゐるのを踏まへれば、歌で「波」が「まがふ」とされる相手は「涙」の「ね」であつて、一言も触れられてゐない「泣声(音)」などが顔を出す余地はない。「ね」に「音」を当てた校注の誤り。

「須磨」の中の歌

たづかなき雲居にひとりねをぞ泣くつばさ並べし
友を恋つゝ

元歌 此れは返へしの歌で、「たづかなき」は「たづきなし」であるが、

雲ちかく飛びかふ鶴もそらに見よ我は春日の
くもりなき身ぞ

の「鶴」に掛けたもの。とすれば「ねをぞ泣く」の「ね」は鶴の泣声に通ずるものとして「泣声」と取るべき様に見えるが、仮にも一個の男子が如何に「たづきなし」とは言へ、宮中で声を放つて泣くものであらうかと考へると、この「ね」は、「たづかなき」から「鶴が鳴き」→「鶴が鳴」に、次いで「鳴」→「泣」と掛かつて、やはり「涙」と解すべき様に思はれる。

互ひに掛詞とされる二つの言葉は、その読み声が共通である以外は意味する処には何の係はりも持たないものである事は、次の後撰

集の用例でも知られる。

題しらず

よみ人しらず

後撰集³⁵⁵ 恋をのみ常にするがの山なればふじのねに

のみなかぬ日はなし

「ふじのね」と言ったからと言ったからとて「ねなく」の「ね」が山に係はりを持たないのは明らかで、「たづかなき」からの「ね」だからと言つて、「ねをぞ泣く」の「ね」を「音」と取らねばならぬとするのは当たらない。この「ね」は「涙」を表はす「ね」と取つてこそ状況にマッチした歌となるものであらう。

「濔標」の地の文章

山寺の入相の声ぐに添へても、音泣きがちにてぞ過ぐし給ふ。

現代の学界の理解からは「夕暮れの鐘のひびきに泣声を上げがちになつて」と訳さねばならぬ文章であるが、「鐘の音ごとに泣声を上げ」たのでは何とも様にならない。此処の「音泣き」の「ね」を「涙」と取るにより、此の段の最後の

干る世なう(或は干る間なう)おぼし嘆きたり

と直接対応するやうになるのであつて、「音」としたのでは対応は成り立たない(「干る」は「涙の袖が乾く」意)。

「蓬生」の地の文章

かひなき世かな、と心くだけてつらくかなしければ、人知れず音をのみ泣き給ふ。

「人知れず音をのみ泣き給ふ」を多くは「人知れず声を上げて泣いた」と訳してあるが、「人知れず」とは「人に知られるのを避けて」の含みもあるのであるから、「声を上げて」など、訳すのは状況に合はない。「ねをのみ」の「ね」は「涙」で「のみ」は「声は漏らさず涙だけ」の意味を持つものと考えるべきものであらう。此処で声を上げて泣いたのでは全体的にしめやかな描写にそぐはない。第一、泣くのを人に知られまいとするならば声なぞ上げて泣く筈は無い。

同じく「蓬生」の地の文章

音泣きがちに、いとゞおほししづみたるは

で、「音泣き」は「おほししづみ」に合はない。底本の「ねなき」の「ね」に「音」を当てた校注の誤り。「泣声を上げ」ながら「おほししづむ」など凡そあり得ぬ仕草である。「ね泣く」は「涙にくれ」ながら、或は単に「泣きながら」ともすべきものと思はれる。

更に「蓬生」の地の文章

この人さへうち捨ててむとするを、うらめしうもあはれにもおぼせど、言ひとゞむべき方もなくて、いとゞ音をのみたけきことにもおぼせ給ふ。

「この人」とは末摘花の侍従の事。侍従にさへ去られやうとするのをどうする事も出来ず、「せめて出来る精一杯の事として声を上げて泣いた」と多くの解説書には注してあるが、この「ね」を「涙」と取り、「せめて出来る事と言へば涙を流すことくらい、お泣きになられた事でした」とでもすべきであらう。せめて出来る事として「おいおい」声を上げて泣いたなどと言ふ表現は、「せめて出来る事」が持つ「些細な」、「控へ目な」の含意を無視するものである。

「胡蝶」の地の文と共に

宮の亮をはじめて、さるべき上人ども、禄取りつゞき童べに賜ふ。鳥には桜の細長、蝶には山吹襲給はる。かねてしもとりあへたるやうなり。物の師どもは、白き一かさね、腰差など。次々／＼にたまふ。中将の君には、藤の細長添へて、女の装束かつけ給う。御返り、きのふは音に泣きぬべくこそは。

こてふにも誘はれなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば

とぞありける。すぐれたる御労どもに、かやうの事はたへぬにやありけむ、思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなめれ

前文中の「録」は引き出物。以下は宮中大法要の手伝ひの者達にそれを下賜した記録と、前段で戴いた御歌へのお返へし。

いくつかの源氏解説書では、此処の「ねに泣きぬべく」は

題しらず

詠人しらず

古今集^③148 わがそのの梅のほつえに鶯のねになきぬべき

こひもするか

を踏まへたもので、この「ね」は「音」であると注してゐる。鶯の鳴き声となれば人を魅了する鳴声とされるが、恋をしたからとて人が聞き惚れる程の泣き声が出ようとは思えない。

古今集の下の句の「ね」がその読み声以外に「鶯の鳴き声」と何の係りも持たないのは先に挙げた後撰集の歌^③や

題しらず

深養父

新古今^③106 煙たつおもひならねどひとしれずわびては

ふじのねをのみぞなく

で、「ふじ」が次に来る「ね」の意味する処に全く関はらぬのと同様で、それはこの「ね」を主要素とするそれ以下の叙述によって定まってくるのである。

則ちこれらの「ね」は鶯の「鳴」、富士の「嶺」の読み声の響きのみを借りるもので（掛け言葉）、その意味に盛るべきは泣声（音）か涙（泣）かとなれば、大人が人が恋しいからと言って声を挙げて泣いたのでは時代を問はず滑稽でしかなからうから、格別古今集を引合

ひに出す迄もなく、「ねになく」は単に「涙を流して泣く」と理解すれば良いものと考へられる。

従つて引用した「音に泣きぬべくこそは」の中の「音」は誤りで、強ひて漢字を当てるとならば「泣（なみだ）」であらうが、「泣く」と競合するとならば仮名のまゝとすべく、意味は「涙がこぼるゝばかりでした」と言ふ事であらう。

「蛩」の地の文と共に

宮より御文あり。白き薄様にて、御手はいとよしありて書きなし給へり。見るほどこそおかしけれ、まねび出づれば、ことなることなしや。

けふさへやひく人もなき水隠れに生ふるあやめのねのみなかれん

ためしにも引き出でつべき根に結びつけ給へれば、「けふの御返り」などそゝのかしをきて出で給ひぬ。これかれもなをと聞きゆれば、御心にもいかにおぼしけむ

あらはれていと浅くも見ゆるかなあやめもわかず

なかれけるねの

若くしく。

とばかりほのかにぞあめる。手をいまずこしゆへづけたらばと、宮は好ましき御心に、いさゝか飽かぬことと見たまひけむかし。

蛩の宮の歌の主語は「水隠れに生ふるあやめ」であつて、述語は

其の主語が「ね泣いた」と言ふ構成になつてゐる。従つて

五月五日の今日でも人が目をかけてくれない水底の菖蒲の
様に、人(あなた)に認められない私は涙(ね)にくれるばかり
です

と「ね」は「涙」と取るべき処。解説書は「ね」を「泣声」とする
が、「泣声」を上げては「みがくれて」が無意味な措辞となつてしま
ふ。隠れてゐる時は泣声は抑へても、涙は仕方なしに出てきてしま
ふ、となるのが自然ではなからうか。ある解説書には「ね」を「あ
やめの根」とし、其れが「流れる」とする見方も紹介されてゐるが、
「泣」でも「根」でも「流れる」と言えるが、関心が得られないか
らと言つて流れて了ふ訳にも行かない。

玉鬘の返しの歌の解釈については、著名な二つの出版社の源氏物
語が驚くべき解説をしてゐる。上の句を「水の表面に現はれてひど
く浅く見える」としてゐるもので、表面に出してしまったものについ
て深淺を論ずるのはナンセンスであらう。

水中の物が一見浅く見える事は徒渉が日常であつた原始生活以来
の体験の常識であつて、泥から現れた水底の「あやめ」の根は、実
際よりはかなり浅く見える筈である。此処は「水底に表はれて」と
取るべき処。

初めの「ね泣いた」歌で水底に存在が現れて、いとゞ浅く(思慮)
見えたとすればそれは理屈に合つてゐる。返歌は、「水底の泥から現
れて、無分別にも泣く菖蒲の根の、何と浅はかに見える事でせう」
と言つてゐる訳であるから、螢の宮が送つて寄越した歌に玉鬘が理

性的にはつしと切り返した事になる。返歌の「ね」は「あらはれる」、
「みゆる」の主語であるから「根」であるが、贈、答何れの歌に於
いても涙の「ね」と互ひに掛け言葉の關係にある事は言ふ迄もない。
空気と水の境界に於ける光の屈折によつて水中の物が実際より浅
く見えるのであるが、中世人はそんな理屈は知らずとも、事実だけ
はしっかりと弁へてゐた筈である。

「柏木」の地の文章

人の 申(まうす)まゝに、さまぐひじり聖だつげんぎ驗者など、おさ(を)く
世にも聞きこえず深ふかき山に籠こもりたるなどをも、おとうとの君
たちを遣つかはしつゝ尋たづね召めすに、けにくく心づきなき山伏やまぶしど
もなどもいと多おほくまゐる。わづらひたまむ給たまむさまの、そこはか
となくものを心ほそく思ひて、音ねのみ時たまむく泣なき給たまむ。

前にもあつたが、「時々声を挙げて泣く」など、言ふ泣き方は実際に
はあまり起こりさうには思えない。心細くなつて時々涙が零れるの
が実態であらう。

抑々「そこはかとなくものを心ほそく思ひ」ながら「声を挙げて
泣く」のは心状と行動が整合しないし、又「ね」が泣声ならば、「ね
をのみ時どき泣く」は「泣声だけを時々上げる」となり、常態を逸
した挙動となる。

「横笛」の歌では

横笛の調べはことにはらぬをむなしくなりし
音こそつきせね

「音こそ」の「音」は底本では「ね」と仮名書きであるものを校注者の見解により「音」に書き変へられたもの。

柏木遺愛の横笛を夕霧が吹いた折の歌であつて、笛の響きが変はらぬとの上の句と、既に空しい(故人の)柏木を思ふ「ね」が尽きないと言ふ下の句が、逆接の助詞「を」で結ばれてゐる。この「ね」は安易に「音」と取るのは誤りで、直ぐ前の歌

露しげき葎の宿にいにしへの秋にかはらぬ
虫の声かな

の「露」に対応するもの、即ち「涙」と取つてこそ、しつとりとした味はひの歌となるのである。

「夕霧」の地の文章と共に

鹿のいといたく鳴くを、「われをとらめや」とて、
里とをみ小野の篠原わけて来てわれもしかこそ
声もおしまね
との給へば

藤衣露けき秋の山人は鹿の鳴く音に音をぞそへつる
よからねど、おりからに、しのびやかなる声づかひなどを、
よろしう聞きなし給へり。

前の歌で「われもしかこそ声もしまね」と詠つてゐるので、後の歌で鹿の「ね」に添へられた「ね」も共に「音」で宜しい様に思えるが、上の句の「露けき」は「秋」にも掛るが「人」にも掛り得るもので、「露けき人」となれば「涙にくれる人」を意味し、鹿の「ね」に山人が「涙」を添へたと解する事も出来る

同じく「夕霧」の少し後で、地の文と共に

そこはかとなく書き給へるを、見つけ給へれば
朝夕になく音をたつる小野山はたえぬ涙や
をとなしの滝

とやとりなすべからむ。

夕霧が出した恋文を落葉宮は手習の用紙にして、取り留めもなく書き散らしてあるのをなんとか繋いでみると、「朝に夕に泣声を挙げてる小野山では涙が音無し滝となつて絶えず落ちてゐる」と読めたと言つてゐるのだが、上の句では実際に「音を立てる」と言つてゐるのに、下の句では「涙が音無しに落ちてゐる」となつてゐるので、下は直接には結び付かない。

専門家は恐らく自明の事として解説書でも触れないのであらうが、この歌は直前の引用歌と照応するもので、この歌の上の句の「なくね」は前の歌の「鹿のなくね」を指し、下の句は共に詠者の「なみだ」を詠つて照応してゐるのであらう。

則ち先の引用歌の下の句の「ね」がこの歌の「なみだ」として

詠まれてゐる事になり、前者の「ね」に「音」を当てた校注には疑義を覚えざるを得ない。「ね」は其の儘「ね」として「涙」にも通ずる含みを持たせておくべきものと考へられる。

同じく「夕霧」の地の文

単衣ひとへの御衣ぞを御髪ごみこめひきくゝみて、たけき事こととは音ねを泣なき給たまふさまの、心こころふかくいとほおしければ、

「たけき事とは」は源氏物語の慣用句のやうで、「せいぜい出来る事と言つては」の意味であるから、實際行つた行為がごく控え目なものであつたことを意味する。この場合、泣声を上げて泣いたならばそれは控え目どころか露はな行動で、「心ふかくいとほしく」などゝなる訳はない。泣声は堪へて、精々涙をこぼす程に控へて泣いたのではないと、「たけき事とはねを泣き給ふ」にならない。こゝの「ね」に「音」を当てたのは誤りである。

「明石」に「たけき事とは、たゞ涙にしづめり。」があるが、言つてゐる内容は此処と異なるものではないであらう。

「総角」の地の文に

わが世はかくて過すぐしはててむ、と思おもつゝけて、音ね泣なきがちに明あかし給たまへるに、ななごりいとなやましければ、中なかの宮みやの臥ふし給たまへるをくをの方かたに添そひ臥ふし給たまへる。

姫宮が我が身の上を色々考へ合はせて、「いっそ此の儘独身でゐようかしら(わが世はかくて過ぐしはてゝむ)」と思はれる様になり、気持ちも誠に優れないので(なごりいとなやましければ)、中なかの宮みやの処ところへおいでになつて一緒に休まれた、と言ふ事であつて、此処に「声を挙げて泣きがちに」とは入れにくい。

やはり「涙をこぼしがちに」とでもすべきものであらう。

又同じく「総角」の地の文で

ありしさまなど、かひなき事なれど、この宮にこそは聞きこえめと思へど、うち出いでむにつけても、いと心よはく、かたくなしく見みえたてまつらむに憚はりて、言こと少ななり。音ねのみを泣なきて、日か数ず経へにければ、顔かほ変がはりのしたるも見みぐるしくはあらで、

直前の文章、「いと心よはく、かたくなしく見えたてまつらむに憚りて、言少ななり」から見て「ねのみを泣きて」の「ね」を「音」とするのは無理である。此処は「ね」を「涙」と取つて初めて前文と整合した記述となる。

「宿木」の地の文章で

中なかへむげに心こころ知らざらん人よりも、はづかしく心こころづきなく、泣なき給たまぬるを、「こはなぞ、あな若わかくし」とは言いひながら、言いひ知らずらうたげに心こころくるしきものから、

ようゝ(じ)深くはつかしげなるけはひなどの、見し程よりもこ
よなくねびまさり 給(たまひ) にけるなどを見るに、心からよそ人
にしなして、かくもやすからずものを思ふ事と、くやしき
にも、又げに音は泣かれけり。

『薫の無体な言動が、知った人であるだけに「はづかしく心づき
なくて」泣く中の君の、以前にもまして奥ゆかしくろうたけた様子
に、こんな人を自分から人に譲っておいて、今になってこんな心に
奪はれるとはと、薫は実に「ねは泣かれ」た」となるのであらうが、
心中如何に口惜しくとも、人前で、其れも男が、果たして声を挙げ
て泣くだらうか。さうは思えない。

この「ね」は万葉集で時に「ねのみしなかゆ」の「ね」を「泣
く」の名詞形と取って強調の表現とした様に、この場合も「泣かれ
けり」の強調と見るのが妥当のやうに思はれる。

「手習」の歌

忘れぬ昔のことも笛竹のつらきふしにも
音ぞ泣かれける

思ひ出の「昔のこと」にも、今聞く「つらき笛の調べ」にも「ねぞ
泣かれける」なのであつて、どちらについても声を上げて泣かねば
ならぬ必然性はなく、この「ね」は思ひ出やメロディーによつて沸
き出づる「涙」と捉へるのが自然であらう。思ひ出が切ないからと
て声を上げて泣いたのでは文学にも歌にもならないのではなからうか。

まして直後に

いとぐわびたるは、涙とぐめがたげなるけしきにて、書き
給ふ。

笛の音に昔のこともしのばれてかへりし程も
袖ぞぬれにし

が続くのを見れば「ね」も「涙」も納得であらう。此処で「笛のね」
の「ね」に「音」が当てられてゐるのは言ふまでも無く当然である。

「手習」の地の文章

けふは、ひねもすに吹く風の音もいと心ぼそきに、おは
したる人も、「あはれ、山臥はかゝる日にぞ、音は泣かる
なるかし」と言ふを聞きて、我も今は山臥ぞかし、ことは
りにとまらぬ涙なりけり、と思つゝ

風の音で山臥が泣声を上げるなど凡そ非現実的な記述であり、且
つ次の行の「私も今は山臥同然。だからこそ涙が止まらない」と内
容が整合しない。あとの文の「ことわりに」が浮いてしまふからで
ある。これを「なるほど、それだから」とするならば、編注者が「音」
としたものが「ね(涙)」であつてこそ前後の記述は整合する。

底本では「風の音も」と漢字を用ひ、次の行では「ねはなかるな
るかし」と漢字は使はれてゐない。此の小文で「音」とルビを振つ
た音は総べて底本では仮名の「ね」であり、これを「音」としたの

は校注者の判断によるものであつて、此処に引用した文章を見れば、底本で「音」とされたものは、仮名書きのまゝの「ね」とは異なるかに窺える。

又次のやうに考へる事もできる。山臥の「音は泣かる」は底本では「ねはなかる」であつて、「ね」は「泣く」の名詞形として単に「泣く」を意味するものとすれば、大人の場合、「泣く」と言つても通常声を上げることではなく、出るものと言つては「涙」だけであるから、次の「とまらぬ涙なりけり」とは矛盾することはない。「音」としたのは記述の齟齬は避けられない。

三、 結語

先に万葉集及び勅撰集中の作例の検討から、「ねーなく」の「ね」には「哭(泣声)」、「泣(なみだ)」及び動詞「泣く」の名詞形の三態がある事を論じた。上述の論考はそれを踏まへて源氏物語中の「ねーなく」表現に考察を加へたものである。

「ねーなく」表現の「ね」を「泣く」の名詞と取つて、「ねーなく」を単に「泣く」と解しても、文章の意味する処はさして変はらないが、「ね」を「音」と取つては其処に描き出される情景に大きな変化が生ずる。

源氏物語検索から取り出した「泣く」事に係る「ね」は、現代の校註者はその殆どに「音」を当てゝゐるが、それが当を得てゐるのは極く僅かで、その他の大方については疑義を抱かざるを得ない。

固より古典には門外漢の身の、源氏全体を踏まへた判断など望めばとて叶ふものではないが、個々の場面の描写から判断する限り、

記述された「なくね」の「ね」の大方は「音」とするよりも「泣(涙)」とすべきものゝ様に考へられる。

追記

王朝期の物語は源氏物語の他数々の物が残されてゐるが、幸ひにも多くは総索引が作られてゐて(狭衣物語⁶、宇津保物語^{8,9}、栄花物語^{10,11}、夜の寢覚め^{12,13}、とはずがたり^{14,15,16})、それ等に就いても源氏と同様な「ね」の検討を行った。

何れの場合も泣く折に使はれてゐる「ね」を「泣声」とせねばならぬ使用例は少なく、それらの殆どは源氏物語の場合と同様、「泣(なみだ)」と取つてこそ整つた文意となるものであつた。従つて韻文、平常文を問はず、泣く描写に使はれる「ね」は大凡「涙」と解しても良い物のゝやうに思はれる。

(注)

- (1) 日本国語大辞典、第二版、第十卷、小学館国語辞典編集部編、小学館、二〇〇一年
- (2) 「ねーなく」の解釈に就いて、研究と資料72、鈴木浩一、研究と資料の会、二〇一五年
- (3) 新編国歌大観、巻一、勅撰集編、「新編国歌大観編集委員会」編、角川書店、一九八三年
- (4) 源氏物語索引、新日本古典文学大系別巻、佐竹昭広他編、岩波書店、一九五五年
- (5) 源氏物語、新日本古典文学大系19、23、佐竹昭広他編、岩波書店、一九九七年
- (6) 日本古典文学大系79、狭衣物語、高木市之助他監修、岩波書店、一九六五年
- (7) 狭衣物語彙索引、塚本、秋本、神尾共編、笠間書院、一九七五年
- (8) 日本古典文学大系、宇津保物語1、3、高木市之助他監修、岩波書店、一九五五年
- (9) 宇津保物語本文と索引、索引編、笹渕他編、風間書店、一九七三年
- (10) 日本古典文学大系75、76、栄花物語1、2、松村、山中校注、岩波書店、一九七三年
- (11) 栄花物語本文と索引、自立語索引編、高知大学人文学部国語史研究会、武蔵野書院、一九八五年
- (12) 日本古典文学大系78、夜の寢覚、阪倉篤義校注、岩波書店、一九八三年
- (13) 夜の寢覚総索引、阪倉篤義著、明治書院、一九七七年
- (14) 新日本古典文学大系50、とほすがたり、佐竹他編、岩波書店、一九九四年
- (15) とほすがたり総索引、本文編、辻村敏樹編、笠間書院、一九九二年
- (16) とほすがたり総索引、自立語編、辻村敏樹編、笠間書院、一九九二年